

方言助詞集(終助詞篇)

—近畿・四国—

鎌田良二(編)

本稿は「甲南国文第二十六号」所載の「方言助詞集(格助詞・接続助詞・副助詞篇)——近畿・(中国)・四国——」に続くものである。

今回は、中国地方を除いた。その理由は前稿にも記したように中国地方の方言助詞研究物は非常に多く、これをまとめるにはかなりの時間を要するものであり、改めてまとめたく思うからである。

終助詞は方言研究上、非常に重要なものであり、これが複雑な方言のニュアンスをあらわすものであることは言うまでもない。そのため、見出し語として標準語形をあらわすことができないものが多い。また、「疑問」とか「念を押す」などという簡単な形で示すこともむずかしいものである。記述が長くなってしまうこともやむを得ないのである。

今回の資料とその略号を記す。

『方言学講座』(東京堂)——略号(三)

『近畿方言の総合的研究』(榎垣実編 三省堂)——(ソ)

『京言彙』(榎垣実著・高桐書院)——(キ)

『分類京都語辞典』(井之口有一・堀井令以知・東京堂)——(フ)

『大阪弁の研究』(前田勇・朝日新聞社)——(オ)

『兵庫県方言文法の研究』(鎌田良二・桜楓社)——(ヒ)

『土佐言葉』(土居重俊・高知市立図書館)——(ト)

資料の原文を、全体的に調えるため記し方を変えたものも多いためをお断りする。

〔か〕

疑問・反語・詠嘆的な気もちを含む疑問などを表わす。

富山・石川・「カ・ケ・コ」ソーカ(そうか)、ソーケ(そうで
すか)。南加賀、イカンコ(行かないか) (ただし、鶴米・白峰)
(コ)

京都・福井・「ケ・コ」疑問。ケ(丹波・近江等)、コ(丹波・若
狭・近江等)(コ)

福井・「カ」だけではなく、カイ・カイヤ・ケ・ケエ・ケヤ・コ
などとなっている。カイ系——東部。コ——西部。ただし、散見す
る地点もあって厳密には区別しにくい。(ソ)

京都・「カ」京都府内でカのほか、カエ・ケ・コ・ヤ等いろんな
形が用いられる。カは共通語に通ずる語形であるが、京都市その他
の地域で、或る程度一般的に用いられ、必ずしも共通語の影響とは
考えにくいものがある。ヨムカエの如きカエは丹後の言葉である
が、何鹿・天田郡など奥丹波にも認められる。奥丹後では、融合音
〔⁸〕を含むキヤアとなりそうであるが、この語においては、その
変化があまり著しくない。奥丹後を通じてキヤアの形よりもカエの
形の方が一般的である。これは、この語があくまでカエというアク
セントの型を保ち、カイ形にならないため、音変化傾向の影響をう

けにくかったのであろうか。なお、共通語の如きカイの形はこちら
では殆ど使用されない。(ソ)

京都・「ヤ」疑問。ヨムヤの如き疑問のヤは船井郡、綴喜郡、相楽
郡等各地において、目下に対する語として使用される。南山城地方
に多いようであるが、その分布地域は必ずしもはっきりしない。(二
人称代名詞ワレ形などと似た性格の分布をするのかも知れない)、
これが昔の疑問助詞ヤと関係があるかどうかはわからないが、とに
かく、どこで用いる時も、ヨムヤ型に発音されヨムヤ型になること
はない。(ソ)

京都・「ケ」口丹波はケの最も多い所で、ヨムケ・ヨムケエなど
いろんなアクセント型で使用される。ヨムケの如きアクセント型の
ものは、山城では多くない。口丹波ではコとケが対立していて、ケ
はやや丁寧な感じを伴うが、山城地方では、ケは、むしろぞんざい
な言葉である。(ソ)

京都・「コ」ヨムコの如きコの形は山城地方にはあまり認められ
ず、丹波地方に多く使用される。口丹波では、男性用語としての性
格をもつが、奥丹波地方では女性も用いる。これに対し、ヨムケの
形は、丹後、奥丹波地方に少なく、口丹波(山城)地方に多い。(ソ)
京都・「カシラン」疑問。ヨムカシランという形は、共通語と同
様、半ば自問自答的な疑問として用いられるが、カシラとならず、

カシラン形で用いられることが多い。このカシランを丹波地方で、早ウ行コカシランマニアワヘンデ(早ウ行カナンダラマニアワンゼの意)の如く用いる場合があるが、その表現形式については、今の所、説明がつかない。舞鶴地方の、早ウ行コカシヤマニアワンデという形も同じ表現である。(ソ)

京都・「カエ」疑問表現。丹後等(コ)

京都・福井・「コ・ソ」(ド)・「ジョ・ノオ」男性が同輩以下に対する語。ケ・ゼ(デ)、ナア、女性の普通語で、男性が用いると、やや丁寧な感じ。疑問ヤは男女とも同輩以下に対する語。但し、疑問ヤ、告知ジョは特定地域にのみ存する。これに対して丹波北部では、コ・ソ(ド)、ノオを男女とも普通語として使用。(コ)

大阪・「カ」疑問にせよ反語にせよ語法上特記せねばならぬ事項はない。ただこれに「イ」をつければ乱暴な物言いとなり、「イナ」をつければ優しい物言いとなること。そして、それは今昔を一貫していること。この二点には注意すべきである。疑問は簡単であるが、反語にはいろんな上接語を取る。ソナナコト、アルカ(イ、イナ)、ソナナコト、アルモンカ(イ・イナ)「あるか、ない」の意である。(男)早ヨセンカ(イ・イナ)、(女)早ヨシンカ(イ・イナ)「しないか、せよ」の意である。チョット、ソレ、取ッテンカ。「呉れないか、呉れ」である。ソナナモングライ俺カテ買ワイデカ(イ・

イナ)「断行せずに居ろうか、断行する」の意である。なお、前代に盛んであった「かえ」は「浪花聞書」にも、「けい・そうけい・くるけい、などいふ。江戸のそうかゝくるかゝなり」と見えるように、早くから訛って「けえ」「け」となり、明治の頃まではまだ残っていたのであるが、今日では、市内から押出されて河内や和泉に余端を保っているに過ぎない。(オ)

大阪・「カ行文末詞」基本的性格は「問い」である。問いの形式をかりて念を押し、依頼し、相談し、雑話し、意思表示をしたりする。カイ・カエとなると品位は下がるが、問いかけの効果が強くなり、強い反語表現になる。ナンナコトアルカエ(青年・男)、ソーヤンカイナ(二十才・女)、泉南・泉北一帯にかけて、カとならんでケが使われる。オジーチャインルケ。このケは和泉から河内に入り、山添いに北上している。三島郡では淀川添いの三島町鳥飼で、デラレヘンヤンケがきかれる。更に北端、能勢町ではカよりもいねいな言い方としてケが使われる。ここではさらにコも使われる。ぞんざいな言い方である。土地の人は、アルケ・アルカ・アルコの待遇差は、アルネ・アルナ・アルノの待遇差は相当するといふ。(ソ)

大阪・「カ・シカ」④テとめの依頼などに。貸シテカ(貸してくるか)、貸シテンカ(貸してくれないか)、頂戴カ(貰ッテイイ

?)、②運用形命令に。貸シンカ(お貸しよ)(コ)

大阪・「ノン・ン・ガ」ノンの用法はカに似ている。問いの形式をかりて、いろいろな用法に立つ。ノンはカよりやわらかく女ととばとしての感がつよい。ンはノンより待遇度がおちる。ガは主として相手の言動をなじり、また、反取する場合に用いられる。品位は中以上である。ガエとなるとぞんざいな言い方になる。(ソ)

大阪・「ヤン・ヤンカ」女性的、じゃないの。アルヤン(カ)、ソコヤン(カ)。(コ)

滋賀・「ケ・コ」疑問、湖北以外で使う。行くケ、そうケ。比良山の西側の朽木、葛川ではコとなる。そうコ、行くコ。(ソ)

奈良・「カ・ケ・コ」奈良県北部、カ(純疑問)、ケ(親愛疑問)、北部高原地方(山添村)でコ(単蔑疑問)、南部では、コ(尊敬疑問)(コ)

奈良・「カイ」北部一般、ソーケー(親しみ・男女)、ソーカー(×・男女)。奈良市の東部、添上郡、山辺郡ソーケー(敬い・男女)、ソーコー(見下げ・男女)。吉野郡天川村、ソーコー(敬い・男女)、ソーカー(見下げ・男女)(ソ)

奈良・「カ」反語型式・強調型式「そこにあるではないか」、ソコニアツリヤンカ(北部)、ソコニアルガナ・ソコニアルガイ(賀名生村)、ソコニアツリヤロ・ソコニアンジョ(北部)。ソコニアル

ジャロー(南部)、アローニ(ヨ) (洞川)。ソコニアルワテ・セヤワテ(そうではないか)(添上郡山添村)(ソ)

三重・「ガナ・ガン・ガレ・ゲ」「そこにあるじゃないか」をもっと軽く表現するのは、ガナ・ガン・ガ、である。これは共通語に訳しにくい語感で、ごく軽く相手に反対であることを指摘し注意をうながす時に使う。志摩・南伊勢では、ガレとなり、牟婁では、ゲとなる。おそらく、ガイの変化だろう。伊賀ではこれに当る、ワシテがある。時に、ワテとも使われる。ココニアルガレ(ここにあるじゃないか)、ココニアルワシテ(同)(ソ)

三重・「カン・カレ・カラ」疑問・呼びかけ。志摩ではカン・カレ・カラとなる。「かの」がカンと変わったかと思われるが、これは鳥羽付近で、カレは南三重各地で、カラは国端で使われる。カラはカレの変化かもしれない。カレは、ガレ・ジャレ・ワレ・ヤレ・ナレなどと共通の形式で、おそらく助詞のあとに来た呼びかけの対称代名詞ワレのくずれたものかと思われる。それぞれ次のように使う(いずれも波切の例)、トツテクレヤンカレ、(取ってくれないかな)、ソコニアルガレ、(そこにあるがな)、イテキタンジャレ、(行ってきたんだよ)、ワカラセンワレ、(分らないわよ)、ソオヤレ、(そうだよ)、アンナレ(あのねえ)、「行くのか」を志摩・南伊勢でイクンコとも、イクンケとも使う、カヨ↓コ、カイ↑ケの変化だろう。

— 助詞敬語参照 (ソ) —

和歌山。「カン・ワン」新宮ことばの一つの特長でもあるが、「ソ
うですか」と返事するとき、ソーカンとなる。(ソ)

和歌山。「カイ・ガイ」疑問・念をおす。ソロニアルヤロカイ(そ
こにあるだろうよ)、ソコニアルヤロガイ(相手に念をおす言い方)
ソコニアルヤロガも同じであるが、疑問はカにある。イの添加によ
って一段と語勢がつよくなり、例えば話し手の行動をあらわす場合
なら、イがつくと話手の意志が明示されてくるように思われる。行
コカ——行コカイ。(ソ)

兵庫。「カ・カシラ」但馬では、カイ(ヤ)、カエ・カヨ・ケエ・
ケアア・キャンなどを使う。播磨ではカを使うのが普通だが、カイ
・カイヤもあり、高砂には、借シテクレッコとコも使う。これは淡
路にもあつて、コオトカンコオ(買っておかないか)のように使
い、ケエともなる。赤穂ではケエとなるほか、アルンカッサン(あ
るのかしら)があり、エエテンキヤナイヤ、ナイコ(いい天気では
ないか)がある。カシランは使うが、カシラとはならない。淡路で
は、ナイネンシランオモチ(ないのかしらと思って)とヤシランを
使う。(ソ)

兵庫・但馬「カ」疑問・反語。「見タイカ(疑問)」「ソソナコトア
ルカ(反語)」の力は全但馬で、ケー・キヤーとなる。朝来郡の生

野ではカナとなる。この疑問・反語の力に詠嘆のヨが接続して、あ
らわな問いや反応を少し和らげた気持になるものとしてカイ・キヤ
ー・ケー・カエ・カヨ・キャン・カヤ・カイヤなどいろいろの形に
なる。出石郡資母の老人は、見タカイ・見タキヤア・見タキャン
(見たかね)、エエ天気ダニャーキャン(よい天気ではないかね)な
どと使う。キャンは資母特有である。「方言とところどころ」に次の
例が出ている。アンタノ傘ダアアリマヘンカエ(出石郡資母の老
人)。ソオダスケエ(そうですか)(養父郡宿南の青年)。アンタノ
傘ト違ウンダスケエ(養父郡建屋の青年)。読ミナッタカエ(朝来
郡山口の青年)。読ミナッタカエ(朝来郡山口の青年)。以上いずれ
も目上の人に対する言い方であるが、対等・目下に対しては、読ン
ダカエ(山口の青年)である。カヤ・カイヤなどヤをつけると、表
現が荒く、きつく、下品になるが、また、その反面、親愛感もわい
てくる。見タカエ(宿南の老人・青年が対等または目下に)、見タ
カイヤ(宿南の老人・青年が親類の人に対して)

丹波。「カ・ケ・コ」疑問をあらわす終助詞には、カ・ケ・コの
三つがあり、コは五十才以上の人で、行クケのようにケを用いるこ
とが最も一般的、行クカのようにカは若い女の人を用いるというこ
とだから、ここでは、コが最も古く、カが最も新しいということに
なる。そして、ケが一般的で広く用いられているのであるが、単な

るケは対等に用いるが、先生行ッテケ（お行きになりますか）のようにテヤ敬語のテとともに用いることもある。そして、コは古いからか、対等、対下に用いて、オマエ行クコ（お前行くか）のようになる。対称に、アンタを用いると、アンタ行ッテケのように、テヤ敬語のテを続けることが多い。だから、敬語のテにコはつながらないことになる。コのように、古く、しきりに用いられたものには敬意がなくなってしまうって、より新しい形の方が改まった感じになり、敬意も含まれるものとなる。

播磨・「カ・ケ・コ」疑問。カはカイ・カイセともなる。コンナ店モ一二度ト来タルカイヤ。赤穂では、強意を表わすカアレがある。ソナナコト知ルカアレ。女性は、カアノとなる。肯定を表わすカイがある。アシタ天気ニナルヤロカイ。疑問の場合、コ・オは男性語、行ッテクレッコ（行ってくれるか）。ケ・ケーは女性語、アンタ行クケー。ケは東播の北部、加西郡・多可郡・西脇市などで盛んに使う。ソーケ。ホンマケ。ホンマダツケ。帰ッタンデツケ。など。

摂津・「カ・ケ・コ・ナ・ヤ」疑問をあらわす「カ」が、武庫川の東地区、西宮市瓦木あたりでは、行コケ（行こうか）、見ロケ（見ようか）、帰ロケ（帰ろうか）となる。尼崎市南の今北から、北の塚口あたりでも、アソボーケエ。コレ買ッテホシイノンケ。詰問す

る場合も同じである。ソナナコトシタラ、アケヘンヤンケ。これらは伊丹市と同じである。三田市寄りの山口や、北摂津の相野、そして、神戸の西端、垂水や、明石では、コになる。行クコ（行くか）、帰ルコ（帰るか）、ソオコ（そうか）。しかし、北摂津でも宝塚市の奥、船坂では、カである。ケは、大阪府の泉南・泉北から河内に入り、山沿いに三島地方から北端の能勢にかけて点々とある。能勢にはケとともにコもある。このケに対して、武庫川沿いの西宮市鳴尾あたりで、ナことが聞かれる。このナも疑問である。「(尼崎) 今北のケ」と「鳴尾のナ」とが武庫川の東岸と西岸とで向かい合っている。そして、ケ↑カ↑コと待遇が低くなる。同様に、ネ↑ナ↑ノと待遇が低くなる。尼崎でドコイキヤァー（どこへ行くのか）という問いかけがある。(ト)

香川・徳島・「カ・ケ・コ」疑問をあらわす助詞は共通語の場合と同じく〔ka〕であるが、徳島県阿南市橋町から海部郡牟岐町にいたる海岸地帯に〔ke〕がつかわれる。

onamo-ikajike (お前も行くのか)。(ko) 徳島県三好郡西祖谷山村、美馬郡一宇村、名西郡神町、那賀郡相生町に、ke-take-teno-kannanko (これを食べてもかまわないか。香川県には、終助詞の〔dewa〕、疑問助詞の〔ke〕〔ko〕いずれもない。〔ke〕

反語 sonnanono kuerukeda i (ん)

高知・「カヤ・カヨ・カネ・カエ」疑問・共通語と同じように「カ」だけで用いられる場合もあるか、多くの場合、ヤ・ヨ・ネ・エ・ノ・ノーンなど、いわゆる強意または詠嘆の意を表わす助詞を伴うて用いられ、それによって種々ニュアンスの違いを表現する。カネ・カエが最も一般的である。ホンナラコレニスルカネ（それならこれにしますか）、ソーカエチットモシラザッタ（そうですか、少しも知らなかった）（コ）

高知・「カヤ・カヨ・カエ・カネ・ケヨ」全眞的に、カ・カヤ・カヨ・カエ・カネ・ケヨなどが使用される。高知市近傍では、カヤは普通目上には使用しない。カヤは最もぶっさらばうに、ぞんざいに聞える。オンシンクノオパーモキチョウカ（お前の家の祖母も来ているのか）、オンシャーヒトリデ ノム ツモリカヤ（お前は一人で飲むつもりなのか）、ハナコサンワ アイタ クルカヨ（花子さんは明日来るのか）、ガッコエ イカンカン（学校へ行かないのか）（室戸岬町・宿毛市）、オマンイキヨルケー（君は行っているのか）（室戸岬町）、オカーチャン キズワ イトーナイカネ（お母ちゃん きずはいたくないのか）、カネは高知市近傍では女や子供が使用する場合が多い。ガッコエ イカンコー（学校へ行きませんか）。コーは土佐村旧森村や大方町田野浦で使用。ソーカレ（そうかい）（大方町湊川、中村市下田）、カレは六十才以上の老人が使用

する。カネまたはカエの変形であろう。大方町湊川では二十才代がカエを、中年がカエを、老人がカレを使用する傾向がある。（ト）

〔な〕詠嘆

京都・福井・アンナアヘエ。今日ナアヘエの「ナアヘエ」の連発は、京言葉的女性語として注意をひく。（コ）

京都・「ナア・ネエ」念を押す。アノナアの如き、ナアが、最も普通に用いられる。ネエは、やや改まったていねいな感じのする語であるが、京都市あたりのネエは必ずしも共通語の影嚮をうけたものでなく、本来的な語形である。丹後、丹波あたりで、ネエを使用すればもちろん、共通語の影嚮という感じである。これに対し、ノオは、丹波・丹後地方に多く用いられる男性語であるが、奥丹波・丹後の田舎では女性も使用することがある。待遇表現としての、ナアとノオとの関係は、だいたい疑問のケとコや、告知のゼ・デとゾ・ドの関係に準ずる。もっとも、このうち、告知の場合は、ほとんど、地域に関係なく、やや丁寧な語とぞんざいな語との対立として、府下各地で使用されるが、ケとコ、ナアとノオとの対立は、或る程度地域差にも関係しそうである。丹後では、このナア・ノオを、アンナアア・アンノオオの如く発音する傾向が強い。これに対して、京都市およびその近くの若い女性には「アンナアヘエ、コレ

「ナアヘ」……」の如きナアヘの形がよく聞かれる。いずれも相手の関心を強くひこうとする意図の表われであり、東海南海地方のナモシ等と思われせられる。(ノ)

京都・「ナー」アノナー、コレナーアンタニナー、アゲヨカ(あのね、これね、あなたにね、上げようか)ヘーをナーに続けて使う事も多い。アノナーヘー、アンナーヘー(あのね)は会話で相手の注意をひくく為に盛んに使われる。京言葉として特徴のある語法である。(キ)

京都・「ナーヘー」親愛の気持を表わす。女性語、ナーにヘーを加えたもの。「あんナーヘー、こんな話がオスノエ」(フ)

大阪・「ナ・ナア」ナ・ナアともに、ネ・ネエもさかんに用いるが、後者の方が敬意が高い。(コ)

大阪・「ナ・ナア」「ね」と「な」との対立は昔から関東・関西の対立である。関東でも「な」は使うが、「ね」に比べれば遙かに少ないし、かつまた、「な」の表わす心持なり意味なりは、関東・関西全く逆である。此方の「な」は目上に使うのであり、もし同輩や目下に対してなら、憎愛を表わすのである。かつて、松下大三郎氏が、「ねえ」と「なあ」とは多少違ふ点がある。「なあ」はア列の音で口を大きく開いて発し、「ねえ」はエ列の音で口を扁平にして発するから、発音の努力に対する自覚が違ふ。口を大きく開くこ

とが無遠慮、快潤、男性的、厳正の感を与へ、口を扁平にすることが歪曲、遠慮、女性的、親愛の感を与える。そこで「なあ」は「善うございますなあ」などの様に鄭重語(です・ます)の下へ使へば男子用の快潤を帯びた最も丁寧な語になる。女子には殆ど使へない。「善いなあ」の如く平常語(「です」「ます」の無い語)の下へ使へば鄭重味の全然無い語になる。女子には独音以外は殆ど使へない。「ねえ」の方は「善うございますねえ」の如く鄭重語の下に使用へば女子の鄭重語になる。男子も使うが「なあ」ほど鄭重に聞えない。対手を親む心持が現れるからである。「善いねえ」の如く平常語の下に使へば鄭重ではないが親む意が現れるから「善いなあ」よりは幾分か穏かに聞える。(標準日本語法)と言われたのは、失礼ながらこの一条のみは附会の強弁である。少くとも氏は東京弁における慣習と「なあ」「ねえ」の本来的な性格とを混同して居られる。東京弁の内輪における慣習の相違はかくかくだと言つて止むべき所を、氏はさらにそれが「ねえ」「なあ」の先天的性格、本質的個性より来るものであるかの如く説きなしている。従つてこの説は大阪を始めとする「な」一本槍地区乃至は「な」「の」使い分け地区の住人から見ると、所詮、一片の独断説か、よく行つても慣習に立つた感想文以上を出るものでない。さて「な」は通常「なあ」と長呼ばれる。勿論、発生的に言えば「な」にさらに感情が加わつて始め

て「なあ」となるのではあるが、大阪弁の常態としては「な」と短呼する場合は極く稀である。「一人で行くのん、いややなあ」これはただ自己の感動を表わしただけで止んだ表現である。しかし、「今日はえろ寒おまんなあ」となると、自己の感動を表わしてさらに相手の共鳴を求める表現である。「そんなこと言われたら、あんたかて困るわなあ」と言うのは、相手の身になっての推量に共鳴を求める表現である。「か」「わ」「じや」「や」等につく時には「い」を介してつのが普通である。この場合の「な」は長呼されない。「早よせんかいな」「誰がするかいな」「お前せんかいな」「行くわいな」「なんじゃいな」「なんやいな」の如く言うのであるが、これから「な」を取去ると、それは乱暴な物言いとなる。「な」をつけると優しい物言いとなる。これは前代へ遡っても変りがない。「が」につく時も長呼されない。「そんなもん俺知らんが」など。

「ノ——」「ナ」と同じ働きをするが、同聲以下に用いる。現代に入ってすっかり衰えた。若い女子が「なんや(い)」のと言う。その外には聞いたことがない。(オ)

奈良・「ナ」奈良県南部では「ナ(ー)」は目下同僚に用い。「ノ(ー)」は目上に用いる(北部では逆)(コ)

奈良・「ナー・ノー・ニャ」内吉野地方、ナー、敬い、男女(女の方が多い)。ノー、見下げ、男。ニャ、親しみ、男女。北吉野地

方、宇陀郡御杖村、ナー、敬い、男女。ノー、見下げ、男。ネヤ、親しみ、男女。(ソ)

奈良

南部方言(ナー、卑。ノー、敬。)

十津川地方(ノーラ 敬)
親 (ジャーカ)
十津川地方

北山地方
ノーラ 卑
ノーエ 敬
ネア 親
ソコー、×
ソカエ、敬
上北山地方

大塔地方
ノー、敬
ネヤ、親
ソコー、敬
ソカ、卑
野迫川村地方

洞川地方
ノー、敬
ニョー、親
ソコー、敬
ソカ、卑
天川村、洞川地方

北部方言(ナー、敬。ノー、卑)
中間部
ナー、敬
ニャ、親
ソコー、×
ソケ、敬
内吉野地方

ナー、敬
ネヤ、親
ソコー、×
ソケ、敬
北吉野地方

純北野
ナ、敬、親
ノ、卑

ソコー、卑
ソケー、敬
高原地方

ソカ、×
ソケー、親
平垣地方

兵庫・「ナア」但馬では、ナアがさらに、ナアと波型の独特の抑揚で発音される（現実にはナアアか、ナアアの形になることが多い）。キオワナナ、ヨオガアリマシテナナ（今日はね、用事がありましてね）のようなナンタをむやみにつけて親愛を表わす。

さらに深い親愛を表わすには、ナアンタと長音化する。また、ネエは他から入った語だという感じを免れない。ヨソイキ用である。養父郡・朝来郡では、ノオを使う。さらに、コマッテシマイマシテヨオ、と美方郡で使うのは鳥取県へ続いている。南部ではもっぱら、ナ・ナアを使う。ノ・ノオも全然使わないわけではないが、男性用で野暮くさい感じを伴う。ネ・ネエはやはり輸入された語だと感じるけれども、その勢力は最も強く、ナ・ナアを使わない婦人も都会地には多い。淡路では、他にくらべて、ノ・ノオがまだ多いように、ノオレをも使い。ノオレ ノオレ イワンヨオニセンカ ノオレ（ノオレ ノオレ（と）言わないようにしましょうね）。また、ナアレもある。（ソ）

兵庫・「ナ」説得・懇願の意がある。キット、オイデナ（きっと、

いらっしやいよ）。ハヨ帰リナ（ナの音はカエリよりも高い）。もしナが低くなれば禁止になる。カエリナ（帰るな）。イキナ（行くな）。ナが低くても、次の場合はいくらか非難をこめた感じになる。ハヨオイデエナ（早く来ないか）モオ帰リイナ（もう、お帰りよ）ハヨ行キイナ（早くお行きよ）モットウマイコト受ケエナ（もっと上手に受けなきゃあ）。

淡路・「ナ」感情をこめて話しかける。柔かみや、親しみがあがり敬意も含む。オマイモ行ケ（あなたも行きなさい）は、下位の者に対する命令である。オマイモ行カンナ、は少しやわらかく、誘う気持である。アンタモ行カンナ、になると「行きませんか」と、改まった多少の敬意をも含むものとなる。感情をこめて、ホナ、マタナア（ではまたね）とやさしい感じである。命令についても、イキイナも「お行きよ」ぐらゐの気持である。（ヒ）

高知・「ノ」余情を添えるネ、ナに相当するものには、ノ・ノシ・ノンシ・ナーその他バラエティがある。（暑イ）ノ（全県）、ノシ（全県）、ノーセ（旧長者村）、ノーゼ（高知市・老人語）ノッシ（潜水市の加江）、ノシ（渭南）、ノンシ（渭南・北川村久木）、ノイ（潜水市下川口、下の加江）、ノエ（須崎市野見）、ノン（旧小筑紫町・吉良川町傍土）、ネヤ（全県）、ニヤ（旧三崎町当麻）、ニヤー（安芸郡）、ニー（鶴来島）、ナー（甲浦町・宿毛市

母島・鵜来島・大月町一切・安満地・北嶺) ナーシ(鵜来島、ナエ(旧十川村戸川・江川崎樞谷)、ネヤは県下的であり、一般には男子が使用するが、山間地帯では、女子も使用する。例、ホンマニ、シワイ、コネヤ(ほんとに強情な子だこと、大月町安満地)(これは母が子に向って言う場合である。) ネヤは大体乱暴な言い方であつて、年上の者にはあまり使用しない。ノーシは、ノン・ノイと共に幾分敬意をよくんでいる。幡多郡の俚謡に「ゆうたのんし、びんちよに髪をひともじあげにふくら」というのがある。ニーは、かつて中村市下田でよく使われていたものらしいが、現在は同市の老人間で稀に使用する者がいる程度である。「中村ヤーヤー、下田ニーニー六里へだてて宿毛はイチキチモンチキチ」とよく言われたものである。「物類称呼」の「詞の終りにつく助語」として、次の記述がある。「京師にて「ナ」八瀬大原辺にて「ニヤ」橋本辺にて「ノヨ」大和にて「ナヨ」摂津にて「ノヤ」播磨にて「ノ」……土佐にて「ナア」「ノウ」「ネヤ」若い人の間では、次後にネーが使用された。(ト)

(ね) 詠嘆・念を押す

富山・石川・「サ・ノ」「そしてね、あのね」の「ね」に当る。

——サ、——ノ、越中。——ノキヤ、珠洲。——ネヤ、内浦。——

エ・輪島。——ナイエ、海士。——エネ、口能登、北加賀。——ンネン、南加賀。——ニヤ、——ワイ、白峰。——ワレ、吉野谷(南加賀)。(コ)

福井・「ナ・ネ・ノ」感動、殆どの地域で「な・ね」が使われている。ナ・ナアのかたちが全地域にわたっている。同時にノオも全体に使われている。ノオは岡安、常神、小原のようなややかたよった地点に多いので後退していつている個もある。しかし、使用地域は全体にわたっている。ほかに感動をあらわす、ヤ・ヤアの用法も広く、また、デを使う地点も少くない。(ソ)

京都・「ニヤ・ミ・ノー」早いニヤ、「ね」に当る、八瀬。「ね」に当る助詞で、あのミ、それでミ、相楽郡山城。詠嘆の意をあらわすノーがある。早いノー、寒いノー、大原。これは旧市内では使わない。西院ではニョーとなる(明治時代)。(フ)

大阪・「ナ行文末詞」基本的性格はよびかけ性にある。よびかけで同情し、協調し、勧誘し、発問し、理解表示を行なう。これらのよびかけ性は、言いさしになっている文を支えている時、特にいちじるしく發揮される。ナカナカアンタタツシャヤサカイナー(ねー)(老婆↓老婦)。イヤヤユーテモシヤナーナイシノー(中年・男同士)。カンニンネ(女子大生↓幼児)。ナー、ナー、ユータラナー(ようようつてばヨー。おねだり。幼児↓母)。一般にナの方がて

いねい。ノはぞんざいな男ことは。ソヤナー、ソヤノー、とは言え
ても、丁寧なソーデンナに対して、ソーデンノーの言い方はない。
また、よりやさしい女性的な命令法である。連用形をとった言い方
には、ナはついてもノは決して添加しない。ネは若い女性層に主と
して用いられる。三十才代以下の婦人にあつては、やがてナを凌駕
していくような情勢にあり、さらに、そのネを支点として文全体が
漸次共通語化されていく傾向をみせる。(ソ)

三重・「ナ・ナー・ノオ」京阪同様、ナ・ナーであるが、ノ・ノ
オもかなり広く使われる。ノオの方は多少老人的、田舎くさい感じ
である。南伊勢・牟婁ではニャ・ネャ・ニャア・ノシなどが使われ
る。ノシはかなり敬意を含むむ紀州風の用法で、ネャ系も南大和と
共通する。(ソ)

奈良・「ミー」回想的內容、アノミー、アノコチニータラ、ガツ
コイイテ、ワルサ、シトツテンミー、ホンデンミー、ヒドッコ、
オコラレヨッテンター(あのねえ、あの子ったら、学校へ行って、
いたずらしておったのさ、それでねえ、ひどく叱られおったんだと
さ)。北・中和地方で頻繁に出る。ミー・アノミー。(ソ)

奈良・「ナ・ノ」「良い天気だね(よ)」に当る感動。

ナ(ナー) 敬い、男女
ノ(ノー) 見下げ、男
北部の大部分

(北部のうち、山辺郡山添村は例外)

ナ(ナー) 見下げ、男女

南部全般

ノ(ノー) 敬い、男女 (北部の一部)(北部山添村)

ノーラ、敬い、親しみ、男女、十津川村

敬語的には、ノー(われ)ラ、ノー(汝)ラ。

ノーラ 見下げ、男

上北山村

ノーエ 敬い、男女

十津川の尊卑と逆転する。

下北山村では、ノー、敬い。ナー、見下げ。ネャ、親しみ。

ノー、敬い、男女

吉野郡天川村・野追川村

ネャ、親しみ、男女

ノー、敬い、男女

吉野郡天川村、洞川

(ソ)

滋賀・ナ・ナーが一般、湖東・湖北、ナシ・ナーシ。えーお天気

でナーシ(よいお天気ですね)。それでナーシ(それでね)。湖南、

ナーへ、ナへ(大津市・栗太郡・野州郡)、ナーヨ(甲賀郡)、ネー

ナ(甲賀郡)、ニョー(野州郡)、ナエ(wa)ラ、ンナエ(湖北)、ン

ナ・ンネ(湖北)、ノー(各地区とところ)(ソ)

滋賀・「ニー」相手の同意をもとめ、さらに勧誘する場合。甲賀
郡の伊賀に隣接している地区、行コニー、ドーショーニー。(ソ)

滋賀。「ネエ・ナア・ナアヨ」ネエ、ナア、ナアヨ(近江、甲賀郡等)。ノオ・ニイ(近江、甲賀郡等)、ナエ(近江、湖北地方)、ナシ・ナアシ(近江、湖東、湖北)、ナアヘエ、特に念をおす場合、女性語的。ナアア、ノオオ(丹後)(コ)

兵庫。「ニ」丹波、特に水上郡の方に多い形であるが、ソーヤニ(そつだね)のようにやわらかいひびきのある語である。「ね」の意である。

淡路。「ニー」南淡町福良で疑問表現について、行ココानीと、カニの形で使われる。洲本には、自分の意志の迷いを表わす場合、疑問のことはを受けて言う。ドナイショーニ(どうしようかしら)。「ネ・ネー」は東京語的な感じがあって全く用いない。「ノ・ノー」は、いろいろのニュアンスで淡路全域に用いられているが、洲本では、特別の場合のほかは殆ど使われない。洲本の用法は、突き離れた言い方や、やや怒気を含んだ場合。見ーノ(見るがよい)。洲本では、「ノ・ノー」は田舎ことばめいた感じで受けとめられている。洲本の南、沼島では反対に「ノ・ノー」が上品で、「ナー」が下品、ぞんざいな感じであるということだ。(服部敬之氏「洲本の文末表現」)(ヒ)

(ト) 詠嘆・強意

京都・福井。「ホン・マア」知ランホン、親しみをこめた告知的主張のホン形(近江の湖北・湖東)、見セテオツケヤアの如く、命令法のとくに堅くつくマア形(越前)など、各地にそれぞれ特徴的終助詞がある。(コ)

京都。「ヨ・ワ」共通語の行クヨの形は京都府ではあまり用いられない。特に、行クヨの如きアクセント型ではほとんど認められず、行クヨの如き型の場合が若干認められるにすぎない。その代りに、行クエ、行クワの形が、京都市から山城地方によく用いられる。行クワの如きアクセント型のワは、かなり使用地域が限られるが、行クワの如き発音の場合は、丹波地方にまで認められる。前者の如き高い発音の終助詞が後者に比し、丁寧な、やわらかい感じを持つことをまたない。(ソ)

京都。「ヨー」突放しの意を表わす用法がなく、すべての動詞の命令形に接する。ハヨー、見ーヨー、出ーヨー、来ーヨー、セーヨー、(キ)

京都。「ヤノ」「ー」であることよの意。アア、シンドヤノ。アホクサヤノ。形容詞、形容助詞の語幹について詠嘆の意を表わす。詠嘆の終助詞「や」「の」の結合。近世以来の女性語。(フ)

京都。「エ」「よ」「は」に当る。イマイクエ(今行くよ)、コレオッキーエ(これは大きいよ)、「エ」と同様の意味でサを使う事も

あるが、今はあまり使わなくなった。エにくらべると語気が甚だ強い。(キ)

京都・「エ」ソソナコトシタラ、アカンエ。ゴ飯デキテルエ。エは女性的表現。(フ)

京都・「ガナ」ガナは確定した事物に対し、他人の疑問や決定を反駁する意を表わす。ココニアルガナ(此処にあるじゃないか)イケーヘンガナ(行けないじゃないか)(キ)

大阪・「ヤ行文末詞」よびかけを本性とする。ナ(a)、ノ(o)の関係は、ヤ(a)、ヨ(o)の関係にしてみられる。命令の言い方にヤを添加する場合、迎用形をとる言い方にはつくが、(書キヤ・見ーヤ・シヤヤなど)、命令形をとる言い方にはつかない。(特に和泉にこの言い方もきかれるが、一般的在来的な言い方とはいえない)ていねいな命令法をやでうけたナハレヤ、オーヤスヤには上品な古めかしい感じを覚えるが、ナハレヨとなると、ぐっと品が下り、ぞんざいになるし、オーヤスという、さらにていねいな言い方は決してヨをとらない。大体、ヤは対等から上向きであり、下向きの場合は親愛感の表明になる。これに対し、ヨは対等から下向きの表現となる。大阪方言では文末詞としてのヤ、ヨは命令の言い方に添加する。この点、主として若い世代に用いられる。ナンニモ、ユーテハレヘンヨ(女子大学生)、ボク知ランヨ(小学・男)な

ど共通語系のヨ。ヤイ・ヤエはぞんざいな男ことは。表現形式はともかく、その意図において相手に何らかの言動を要求する言い方に添加。シメシトツタンカイヤイ(中年男↓妻A赤ちゃんのVおしめをとってやったのかいオイ)、ハヨシテクレヤ(小学・男↓母)、北摂・泉北で「おい」「こら」相当のぞんざいな言い方である。エ文末詞が探で用いられるのは和泉中心である。ダレニシヨエ(誰にしようか、岸和田)。相手にやさしくよびかける効果をもつ、上品である。一般的にはエはもっぱらダス・デス・マスなど丁寧な言い方に添加し、語尾のスと融合して、ダッセ・デッセ・マッセとなる。このように丁寧語にのみ添加する所にこのエの品位がうかがえる。(ソ)

大阪・「エ」モオ五時デッセ(ですと)。オマス・ダス・デス・マスに融合してのみ用いる。若い層はヨに代える。(コ)

大阪・「デ」命令。女性語、中年以上になりつつある。書キデ(お書きよ)、ハヨ為イデ。(コ)

大阪・「シ」女性語、外寒イシ。若い人は「外寒イワヨ」などに代えてしまった。(コ)

大阪・「イ・イナ・イヤ」終助詞カ・ンカ・ヤンカ・ナ・テ・ト・ガ・ワに添えてニュアンスを加える。イナはまた種々の文節につく。取ッテエナ(取ってよ)、何オイナ(何をき)(コ)

大阪・「ワ」男女とも、アメイヤワ、スグ止ムワ（イハナ_V）。女、アメイヤワ、止ムワ、アメイヤワ、止ムワ。若い人には少ないが、マスマワが融合すると、走ッテ行ッテ来マッサ。（コ）

大阪・「ガ」主張。有ツタヤロガ（あつただろう、それ見ろ）、カメヘンガ（イ）（ナ）（かまわない、さあね）（コ）

大阪・「イ・イナ」「イ」は上下一段・カ変サ変動詞の命令形につく「イ」（原形「よ」）は、今日ではもはや助詞とみるよりは語尾の一部と見るのが適當である。見_I、起キ_I、寝_I（ネー）、食ベ_I（タベー）、来_I、セ_I（セー）。

「イナ」これに反対して、すべての動詞の連用形はそのままでも命令の意を表わし得るから、これにつく「イナ」は感動を表わす助詞と見なしても不合理ではない。ただし、下一段の場合は既に音変化を起して「エナ」にまで進んでいる。買_Iイナ、見_Iイナ、起キ_Iイナ、寝_Iイナ（ネーナ）、食ベ_Iイナ（タベーナ）、来_Iイナ、シ_Iイナ。「デ」すべての動詞の連用形について命令の意を表わす。もっぱら少女の用語である。語源は詳かでない。「デ」の上が一音節ならば、必ず長呼される。買_Iイデ、見_Iイデ、起キ_Iイデ、寝_Iイデ、食ベ_Iイデ、来_Iイデ、シ_Iイデ（オ）

大阪・「イ」語気を烈しくするに用いる。しかし「じゃ・わ・か・を」につく以外にはあまり聞かぬ。原形は「よ」である。ナンジ

ヤイ、俺ジャイ、眠（ヤ）ワイ、行クワイ、早ヨセンカイ、誰ガスルカイ、オ前ガセンカイ（汝がせよの意）、何ヲイ。

「イナ」もともと右の「イ」に「ナ」のついたものであるが、ここに挙げる「イナ」は、もう分解ができないもの、分解しては意味をなさなくなるものである。例えば、前条の「イ」には「ナ」をつけても取去っても語気に強弱の差が生ずるだけであるが、動詞の連用形から転成した命令につく「イナ」の如きは「イ」と「ナ」とを引離しては意味をなさなくなる。また、勧誘の表現「行コイナ」などの「イナ」も同断であるし、願望を表わす「テ」「ト」につく「イナ」などもその例になる。但し、この時は「テイナ」はテーナとなるから「エナ」と言った方がよからう。来_Iテイナ_V来_Iテエナ、シトイナ。

禁止の「ナ」にもついて、「言ウナイナ」「行イナイナ」と言つし、その外にも、イイエイナイイイエエナ、がある。一体こうした「イナ」は前代を見ると極めて盛んであった。「いえ」「いいえ」（否）は勿論「いや」（厭）「なんの」「申し」等にもついて「イヤイナ」「ナソノイナ」「申シイナ」等と言うのが普通であった。このような感動詞の外、「それはそれはおもしろい事イナ——聖遊廊」「それ申、狼のこしかけというものが有ナ、てふどそれイナ——月花余情」「木綿屋の娘は、どうしたイナ——短筆菫菜」と名詞・代名詞・助動詞

にもついたし、わき様はいやとイナ、サイナ、わたしもイナ、そんなてつくは(鉄火)言たかて、なんとおもふ物でイナ、ハテマア、聞て見るまでイナ、おまへのよふな土左衛門は遠眼鏡で見たばかりイナ——短華菴葉。などさまざまの助詞にも手広くついたのである。(オ)

大阪・「ヤ」命令・禁止に用いる。優しく念を押すのである。命令——待チヤ、待チナハレヤ、待ツテヤ、待ツトクンナハレヤ、待ツトオ呉レヤスヤ。禁止——買イナヤ、買ナハンナヤ、買ワントキヤ、買ワントキナハレヤ。(オ)

大阪・「エ」これは実はもう衰滅してしまつた助詞である。前代には盛んに用いられた。疑問の「カエ」と同じに使う場合と、念を押す「ソエ」と同じに使う場合とが主なものであつた。「誰にしやうへ——浪花花街今八卦」「はるのはどこへいたへ——短華菴葉」等は前者であり、「ちやちや(茶)一ツをこしてくれなせ、塩いれてへ——月花余情」「サバへ(さらばえ)——短華菴葉」「ヨウヲイデタへ——短華菴筆」「おいでたへ(江戸できたく也)——浪花聞書」等は後者であるが、この「エ」が今もなお左の訛音の中に残つてゐるのをここに指摘したい。「かえ」の意……見料はなんぼでおまっせ。今度は何であつせ——以上、立花家花桶「大道占ひ」。「ぞえ」の意……なんぼでもおまっせ。上げまっせ、そつだつせ。

すなわち、「……すえ」の訛りである。(オ)

滋賀・「イ・ヤイ」親愛的な命令、動詞未然形接続、湖南、湖東、読マイ、見ヤイ、寝ヤイ、シヤイ・来ヤイ。五段にはイ、それ以外にはヤイをつける。老人使用、中年以下は使わない。(ソ)

滋賀・「ガエ」湖西の高島郡、アツチャ行クガエ(あっちへ行くよ)(ソ)

三重・「イ」命令。傘姿で、行ケイとなる。このイは「行ケンイ」つまり「ソレ」の転じたものかもしれない。(ソ)

奈良・「ヨ・ラ・イ」北部、ハヨネーヨ(早く寝よねえ)、コッチイコイヨ(こちらへ来いねえ)。南部、ネヤンシラ(寝ましようよ)、イコーラ(ヨ)(行こうよ、洞川)、イオトンニコラ(魚を取りにいこうよ、ゲロイコライ(私の家へ行こうよ)、マイシヨールイ(しまいしようよ、下北山村)、コオラ(言おうよ)、カコーラ(上北山村)、カコーラ(書こうよ)、デローラ、ミサシヨール、ミローライ(十津川村)、和歌山県に通じるラ・ライが活発である。(ソ)

和歌山・「ワン」「行くよ」のとき、イクワンというが、これは、「そうかの、いくわの」の「の」の〇母音脱落。

兵庫・「ヨ・エ」命令形につくマテヨ、マツトレヨのヨはあるが、終止形につくアルヨはない。「さ」はなく、イマ行クエのエを使うのは女性である。赤穂では、ハヨ行コエ(早く行こうよ)、イキマ

ホイエ(行きましようよ)となる。この種のエは京都が本場で、他では、チガイマッセ、オマッセ、コレダッセ(これですよ)のような融合形で使うことが多い。もともと女性語だから都会的な柔さがある。高砂ではやはり女性がドコカマレタンエ(どこをかまれたの)、アシエ(足なの)のように使い、これは京都での用法と同じである。(ソ)

兵庫・「ヨオ」ソオダヨのように使うのは輸入語と感ぜられ、ネと同様であるか、ヨオ、ワレ(ねえ、お前)のように感動詞的に使うのは極めて野卑な語と感ぜられている。(ソ)

兵庫・「ガア」「よ」にあたる。「方言とことば」に、『物類称呼』から次をぬき出して、さらに美方郡村岡の青年の例文をあげている。京師にてナ、播磨にてノ、因幡にてケン、但馬にてガー、出羽庄内にてチャ。このガーは但馬では欲求不満の反抗気分をあらわすのである。ナアシタツテ、オコルケド、有ツタガー(無くしたと言つて怒るが有つたよ)。ソニヤアニ言ヤアデモ、行クガー(そんなに言わなくても行くよ)。親や上位者から、くどく命令されたり、叱られたりした時に、反批的な気分で、自らつぶやく如く言うのである。アクセントは尻上りになる。これは朝来郡北部から日本海岸までにあるが、この用法は次第にすたれて、ガナに代りつつあるということだ。(ヒ)

兵庫・「ガナ」「よ」にあたる。ガナはガアよりも妥協的であり、いくらかわわらうだ旨い方になる。ハヤアコト、行ツテコイヤと、親が命令し、催促すると、イクガナ(行くよ)と、反意をこめて、自らつぶやく、あるいは答えるのである。アシタ、祭デスガナ。これは対上にも対下にも使う。ソナナコト、ヨオスガナ(よろしい、やめておきなさい)。押しつける気分である。五時ンデスガナ。念を押す程度のものである。(ヒ)

兵庫・「ヨ」親しみ、^労わりのやさしい心をもって言う場合に使われる。ハヨ帰リヨ。ウマイコト受ケヨ。ヨの方にアクセントがある。

淡路・「カレ・ワレ」強い否定・強調などをあらわす。イノカレ(帰ろうよ)、無イワレ(無いわよ)、ケーヘナレ(来ないじゃないか)、これは、大阪の河内にもあり、紀州にもある形だが、播州赤穂では、カレレ、ワレ、となつている。(ヒ)

高知・「チ」チにヤを添えて、チャの形で頻繁に用いられる。単独で用いられることは少ない。ソーチ、ソーチ(そうとも、そうとも)、チはチチとも。若い人々にはあまり用いられない。イカンチャ、カサレンチャ(いけないよ、貸したら駄目よ)。(ヨ)

〔せ・ぞ〕軽く、または強く指示する

福井・「ゾヨ・ドヨ・ワイ・ガナ」ドヨはゾヨの転であろうが、
敦賀市に散見。ワイはワイナのかたちともなり、敦賀市・三方町に
あるが分布は相当に広いだろう。ガナは、大飯町大島である。(コ)

京都・「ゼ・ソ」ゼ・ソは共通語とだいたい同じように用いるが、
京都府ではたいいてい、デ、ドの形をとる。(京都府では、この語形
自体が少ないが) (ævd) の音変化のうち、この語形のみが非常に
著しく、カダン(火山)等の認められない所でも、この語の場合の
みはデ・ド形になっている場合が多い。頻出度数によるのであろう
か、それとも、知的意味に殆ど関係なく、しかも、文末に表われる
というような特殊条件によるのであろうか。(ソ)

京都・「ゼ・デ・ソ・ドの待遇関係」ゼ・デ・ソ・ドの待遇関係
は疑問のケ・コの場合に準じ、ガ・デの方がソ・ドよりもやや丁寧
な感じをもつ、しかし、エは、ゼ・デよりもっと丁寧な感じであ
り、完全に女性語的品格を保っている。なお、行クジョオの如き、
ジョオの形は、京都市には少なく、丹波、山城の田舎で使用される
が、その待遇関係の程度は、だいたいソ・ドに準ずる。(ソ)

京都・「ゼ(デ)・ソ(ド)・ヨ・エ」告知的表現、少しずつ異つ
た品格を持ちつつ並用される。ゼ(デ)・ソ(ド)は京都では余り
多くない。京言葉エは、やや女性的品格を持ち、共通語におけるヨ
の働きと、ゼ・ソの働きとを共有している。ゼ(デ)・ソ(ド)・ジ

ヨ、近江・丹波の田舎。ザア(越前)。ヨ・エ(京都市付近)(コ)

大阪・「タ行文末詞」ド・デ、自分の意志、見聞をつよく指示し
主張する。ドは、ぞんざいな男ことば、デはドより品位が高い、て
いねいな言い方。ハヨ、オキナ、アキマヘンデ(母↓娘)。ドイ・
ドエ・デエは(全般的ではないが)常に疑問詞に感じて用いられ
る。ぞんざいな男ことば。中年以上の女子にあつてはデエを用いる
ことがあるが、必ずナを下接する。ナニシタンドイ(三十男↓弟)、
ナンデエ(青年同士)、ダレデエナ(誰なのよ、五十女↓娘)。(ソ)

大阪・「デ」江戸のゼ・ヨに似ている。念を押して相手の注意を
呼ぶのである。モウ行クデ、行クネンデ、ウチ、行ケヘンデ、行ケ
ヘンネヤデ、ソウヤデの如く用いるけれど、これは多くは婦女子が
使う。男は優しい物言いに使う。(オ)

大阪・「デ・ソ」デ——「ゼ」に近いが男女ともよく使う。御飯
ヤデ。ソ——男性語、良エソ良エソ。(コ)

滋賀・「ゼ・ソ・デ・ド・ジョ」強意断定。ソヤゼ、行クンヤソ、
行クデ。湖南、女子↓デ、男子↓ド、の傾向があるが、女性用語、
男性用語とはつきりわきますることはできない。ソは湖北では使われ
ない。湖東の愛知川辺りは男女とも使う。八幡市、湖北の西浅井村
ではジョを使う。(ソ)

奈良・「デ・ド」奈良北部、ホレ、イクドー(それ行くぞ)オ列

の発音は耳ざわりがきつい。北部女性、イクデー、エ列で確かめ念を押し、自分を励ます。南部の下北山村、十津川では、イクゾーと、「ゾー」だけである。大塔村では、学校ハジマツトルゾ(ジャ)、この程度では北部ほどのニュアンスもない。天川村の洞川、アイサ、アメレレ(明日、雨だぜ——卑)、アメジャレ(雨ですぜ——敬)、ドコイ、イクンレ(どこへ行くのですか——敬)、イクンロ(行くのだぞ——卑)、ハキョタンロ(掃きおったのだぞ——卑)、「レ」は敬い、「ロ」は同輩以下。アメレレとアメジャレとは、レとジャとで尊卑を区別する。洞川、サンシヨ(しなさい)、ネヤンシヨ(おやすみなさい)。ヨをつけると敬い、つけないと卑しめ。(ソ) 奈良・「デ・ド」「そこにあるぞ」の意で、

アルド 見下げ 男

県下全般

アルデ 親しみ 男女

アルガロ、敬い、男女

アルガヤ 見下げ、男女

吉野郡下北山村

(ソ)

三重・「ゾ・デ・ゼ・ド」ゾオ・ゼエと長音化もする。(ソ)

兵庫・「ゾ・ド・ゼ・シヨ」但馬では、コニアルゾ、ゾオ・ド・

ドオ・ゼ・シヨ・ジュ・ジャ・ジなどとなる。ジュ・ゼはゾエから。シヨ・ジャはシヨ・ソヤから生まれたものらしく、ドはゾの訛りだ。播磨では、ココニアツゾ、アツド、アンゾオ、アンドとな

る。赤穂では、アルド、カマヘンド(構わないぞ)は男性、アルデ、カマヘンデは女性用語だという。淡路には、ワタシラシランゾナ(私などは知りませんわよ)のゾナがあって、四国と呼応する。(ソ)

兵庫・但馬「ゾ・ドー・シヨ」「ぞ」の意。ココニアルゾは、ゾー・ド・ドー・ゼ・シヨ・ジュ・ジャ・ジなどとなる。ゼは美方郡村岡町によく行なわれ、養父郡以北の各地に点在する。主に男性用語で対上、対等、対下何れにも用いられ、デよりも荒くソよりも軽い、念を押す語である。イクゼ、スルゼ、有ルゼなどと対下に。行キマッセ、シマッセ、有リマッセと対上に用いる。養父郡北部ではゼがジエとなる。イケンジエなど。ジヨは養父郡の南西、大屋町にある。

「方言とところ」に次の例がある。

大屋のジョージョー、言わめや、また言ったジョー、悪ありいジョー。

大屋の人が自らのことを反省し、終助詞ジョを使うのをやめたかと思ひ、しかも、容易にやめられないことを自ら興がって、自らはやしたことばであるという。このジョーやジョは大屋町とその東隣の養父町、南の和田山町、山東町にもある。上位者や外来者に対するときは、楽シカッタデッセ、行キマッセ、見マシタデエとなる

のに対して、対等者や下位者に対するとき、**オシカッタジョ**、**行クジョ**、**見タジョ**となる。**ジョ**・**ジョー**は心安さと無遠慮さが伴っている。男性の対等、対下用語である。**ジョ**が耳につきすぎるので、青少年の中には**ジ**を用いることもある。**オシカッタジ**、**行クジ**、**見タジ**。**ゾ**はゼより更に強く念を押す。男性用語、但馬全域で行なわれるが、使用頻度は少ない。**行キマスゾ**、**行クゾ**、**有ルゾ**。上方の**ド**が山陰線に沿って養父郡を東寄りに北上して**ジョ**・**オ**を東西に分けてしまった形になる。が、**ジョ**の地域にも**ジョ**と同じ様に行われ、特に朝来郡の和田山町、山東町に多いが、北の日本海や、その他、但馬各地に散在している。男性の対等、対下用語である。**行クド**、**有ルド**、**スルド**。

但馬・「**デ**・**デエ**」但馬全域からさらに播磨にも行なわれているが、養父郡以南と、その北とは少し用法に違いがある。養父郡以南では女性語であり、男性が使えば丁寧なやさしい語として対上に行っている。**ゾ**が対等、対下用語であるのに対するものとなる。**行クソ**（対下）に対して、**行キマスデ**が対上である。**オソオスデ**が対上や外来者に対して用いられる。

丹波・「**ド**・**ゾ**」**オコラレド**、**オコラレゾ**（叱られるぞ）
ド・**ゾ**は両方とも用いる。

播磨・「**ド**・**デ**」強意を表わす。**行クド**。雨降**ルド**。「**ぞ**」にあ

たる。**ド**は男性語で、**デ**・**デエ**は女性語。

淡路・「**ソナ**」「**ぞ**」の意。ワタシラ知ラン**ソナ**（私などは知りませんわよ）の**ソ**がある。これは四国にもある形である。

淡路・「**デ**」強意をあらわす。センセ、ソッチャ、道ヤチガウデ（先生、そちらの道とは違いますよ）。これは、田中万兵衛氏によると敬意をあらわすものとなっている。（ヒ）

高知・「**ゾ**」強意。多くの場合、**ネ**・**ノ**（一）、**ノ**・**シ**を伴う点
が特徴といえよう。**ゾ**・**ネ**が最も普通に用いられ、他は若い層の人々からは次第に忘れられつつある。また、しばしば疑問の意を表わす副詞と呼応または結びついてカと同じ意味に用いられる。**ドッチガエイゾ**、**ネ**（どちらがいいと思いますか）。**ナンボゾシラン**（いくら知らない）。**ヒトリモンガ**、**カチゾネ**（じゃんけんという子供のことばである）、のように用いられる。子供をたしなめる時「**ドウソ**」（何をしているかという気持）というが、ここに既に強意の表現か疑問の表現に転じようとする契機が見られる。（ヨ）

高知・「**ソ**」文末に位置して強く指示する場合の**ソ**である。断定と同様の働きをもする。**ナゼワラソ**（何故笑うか）、**アリヤダレソ**（あれは誰か）、**ソングーナキヨルト**、**ドヤソ**（そんなに泣いているとなぐるよ、大月町弘見）**ソ**と同類のものに、**ソヨ**・**ゼ**・**ゼ**その他がある。幡多郡での言い方、「この本はいくらだ」に相

応するもの。(コノ本、ナンボ)ヤー(佐賀町荷福)、エー(佐賀町荷福)、ザイ(宿毛市)、ザン(宿毛市)、ゼ(一)(中村市)、ゼヨ(清水市)、ゼヤ(清水市、大月町)、ゼン(宿毛市)、ゾナ(沖の島)、ソエ(清水市三崎)、ソナン(宿毛市、小筑紫)、右の終助詞は、幡多郡以外で使用するところもある。これらの助詞の實際の使用例をあげる。オマヤーイクツヤ(お前はいくつだ)(池川町谷)コリヤ、オラノヤ(これはおれのだ)(池川町竹谷)ウチャーイチヤッタガザイ(わたしは行ってあげたのだ)(宿毛市萩原)、ネコン、イオ、トッタゼー(猫が魚をとったよ)(清水市)、ウシニホーグラレヨッタゼヤ(牛につかれようとしていたよ)(土佐山村)ホンマカナン(ほんとうかね)(宿毛市、小筑紫、室戸町では、「この本はいくらだ」に相当するものは、コノホンワナンボゾンである。もっともゾンは、多少敬意をふくんだ言い方のものである。(ト)高知・「ゼ」強意。単独で用いられることはほとんどなく、普通、ヨを伴い、ゼヨの形で用いられる。ショー、マッコトゼヨ(ほんとはんですよ。「ショー」は「ほんとに」の意)。(コ)

〔な〕禁止

福井・「ナ」上接助詞「スル」のとき、セナ(セナヨ・セナヨオ)、センナ・スナ(スナヨ)、スンナとなる。(ソ)

京都・招井・「ナ」書キナ(禁止)、書キナヤ(禁止)、書キナ(命令)、書キイナ(勧誘)、書キナイナ(勧誘)、書キヨシ(女性語、軽い命令)、書イトオミ(女性語、軽い命令)。(コ)

大阪・「ナ」ナのつけ方には二通りある。すべての助詞の連用形十ナニ女言葉、優しい言葉、終止形十ナニ男言葉。さればかの「浪花聞書」に「見な」を「見る也、江戸で見なといへば見よなり」と言い、「ちよこイイナ」を「ちよこさいいふな也」と言い、「ききな」を「きくな也、江戸にてききなといへば、きけなり」と言って驚いたのもっともなことである。勿論、東西のそれは音調を異にするから、耳に聞けば直ちに分明するのである。(オ)

大阪・「ナ」サワグナ、起キルナ。やわらかな禁止、サワギナ、起キナ。(コ)

滋賀・「ナ」連用形につく(サ交・カ交は未然形にもつく)、書キナ、来ナ、シナ、来ナ、セナ。(ソ)

兵庫・「ナ」ナイともなる。ソナン事スナ。廊下走ソナ。「ナ」は、また、ノオと共に、だめ押しにも使われる。そして、軽い疑問をあらわすこともある。マタ雨ヤナー。この時、マタ雨ヤノー。となれば男性語である。(ト)

岡山・広島・「ナ」岡山市・広島市も終止形につくが、五段活用以外に接続するときは「る」を脱落させて、オキナ(起)、オチナ

(落)、ナゲナ(投)、アテナ(当)、クナ(来)、スナ(為)となる。(n)

愛媛・「テレン」禁止を表わすには「tenen」を使うのが普通であるが、強きう時には「na」が表われる。この「na」は、kuna、sunaと五段以外の動詞にも続き、okina(起きるな)、nina(見るな)、akeba(受けるな)とも使うが、これは共通語の勸奨態との混乱を起しやすい。(コ)

高知・「ナ」高知県方言には終止形接続の「ナ」の外に連用形接続の「ナ」がある。前者が共通語の場合と同じく禁止を表わすに對し、これは優しさとすような感じが含まれているので勸止の意を表わすといえはよからうか。下に助詞「ヤ」「ヨ」を添えて複雑なニュアンスの相違を表わすことが多い。ソーイイナヤ(そんなにいうものではない)。モーシナヨ(もつしてはいけませんよ)。(コ)

(その他)特殊なもの

富山・石川・「ガ・ガダ・ガヤ」「の・のだ」の意。見ルガ(の・越中)、見ルガダ(のだ・呉東)、見ルガヤ(のだ・呉西・能登・加賀ハ湖南を除くV)。(コ)

石川・「ニヤ・ジャ」「のだ」の意。見ルンニヤ、見ルンジャ(のだ・加賀市ハ湖南V)。(コ)——ジャは助動詞に近いものか。

京都・福井・「サ」ナンヤイサ等のサは、エよりやや語気の強い女性語としてよく用いられるが、たいていは、ヤイサ・カイサ・ワイサ等の形をとる。東京語のサと異り、文末にのみ使用される。(n)

京都・「ヨシ」ヨシは近年婦人子供の間^に勢力を得た言葉で、十数年前には余り聞かなかつた。標準語の「な」「なさい」に当るものだ。動詞では連用形に連り、命令・勸誘の意を表わす。書キヨシ、出ヨシ、着ヨシ、来ヨシ、為ヨシ。この否定表現は、書カントキヨシ、出ントキヨシ、となる。これは紀州の用法によく似ているが、紀州から移入されたものではなく、恐らく山科あたりから移入されたものかも知れない。紀州でも日高郡では否定表現は「書きよすな」「出よすな」となる。くらべてみて甚だ興味がある。(キ)

京都・「ヨシ・オミ」命令・勸誘。読ミヨシ、読ソドオミの形がある。京都市およびその付近に用いられる女性語であるが、読ミヨシは、比較的若い女性に用いられ、読ソドオミはかなり年配の女性にも用いられるようである。その他、ヨンデミナ、ヨミナ、ヨミナイナ、ヨミヤ等の形も命令勸誘の意を表わすが、男性にも用いられ、また山城、丹波にかなり広く使用される。(ソ)

京都・「ヨシ」「なさい」の意。ハヨ行キヨシ、起キヨシ。動詞連用形につき、ていねいな命令を示す。昭和になってから、若

い女性が使用。——オシとも。(フ)

京都・「カラニ」助詞「て」につく強意の終助詞、何シテルネン、オトナノクセシテカラニ。(フ)

京都・「零記号の疑問表現」ヨム・ヨムノン・ヨムンヨ・ヨム(シ)エ等の形が用いられることもある。概括的にいうと、ヨムが・ヨムノ等が一般的である。ヨム(シ)エ・ヨムケ等はやわらかい感じをもち、やや女性語的である。ヨムコは男性的性格をもって、同輩以下に用いられ、ヨムヤは、目下に用いられる。(ソ)

京都・「ガナ」確定した事物に対し、他人の疑問や決定を反駁する意を表わす。ココニアルガナ(此処にあるじゃないか)、行ケーヘンガナ(行けないじゃないか)。(キ)

大阪・「シ」女子用の助詞。「テ」よりも軽い。しかし、今日では殆ど聞けなくなった。イヤヤシ・ソーヤシ・ウチ 行クネンシ・エシ。この「シ」は上代から文語に存する間投助詞「し」(例えば「生きとし生ける」など)の転用であろうと言う説もあるが、根拠は薄弱である。愚考によれば、「し」は「せ」の訛りではないかと思ふ。すなわち、「おますえ」「……ますえ」「……だすえ」等の訛った「おますせ」「ますせ」「だっせ」等から分離独立した「せ」で「いややせ」「そうやせ」などと言っていた(郡部にて今なお聞くことあり)の「し」に変わったものではないかと思う。(オ)

大阪・「テ・ト」すべての助詞の連用形(四段は音便形)について願望の意を表わす。「テ」は「ておくれ」の下略、「ト」はその訛った「トクレ」の下略である。「ト」は「トオ」と長呼されることが多い。買オテ(トオ)、見テ(トオ)、起キテ(トオ)、寝テ(トオ)、寝ベテ(トオ)、来テ(トオ)、シテ(トオ)。(オ)

大阪・「テ・ト」「と言ふことだ」の「言ふことだ」が内包されて言いさしの形になったものである。が、その内包されている「と言ふことだ」の意味が強められると、その語気がテ・トをして文末詞的な機能に熟せしめる。テはトに比べて語形が変化しているだけに文末詞としての転成の度合が熟していると言えらる。トは主として中年以上の婦人に用いられる。コーナルンヤテ(中学・男同士)。(ソ)

大阪・「テ・ト」伝聞(高く付く)、受ケテンテ・受ケテント(受けたんだって)。(低く付くテは説伏)受ケテンテ(受けたんだってば)、アカンテ(だめだってことよ)。(コ)

大阪・「トオ」依頼、女性語、中年以上になりつつある。チョット来トオ(来ておくれ)。(コ)

大阪・「ワ」係助詞「は」の転用である。東京では女言葉であるが、此方は古来男女共用である。ナンデモエエワ、ウンザリスルワ、ヨロシマスワ、ワタイガ持ちマスワ、結構ダスワ。終りの三つの「……スワ」は通常訛って「マッサ」「ダッサ」となる。しかし

同じ「ワ」でも「ソウヤワ」「行クネヤワ」「行クネンワ」「行クネンヤワ」と言えば女言葉となる。語法上の相違でなく、慣用上の相違である。しかし「ワ」が「ワイナ」となれば、昔今、男女間に何の相違もない。(オ)

大阪・「ガ」格助詞「ガ」の転用である。相手の聲を啓かんとする意を表わす。転じては詠嘆をも表わす。「ガ」のみ単独にも用いるが、多く「ガナ」として用いる。啓蒙……ソレ俺ノンヤガ(ナ)。「おうい」「何や」「何ややないがな」——落語、黄金の大黒。詠嘆……マアエエガ(ナ)、ソソナモン俺知ランガ(ナ)。今日なお前代に劣らず盛んなものである。(オ)

大阪・「クライ」「ぐらい」と濁らぬ。勿論だと抑えるのである。他国の「とも」に当る。「ヘエヘオマスクライ」であって、これは前代の例にはまだ接しない。(オ)

大阪・「モン・トコト」名詞系文末。ナンニモクレヘンモン(何も呉れないんだモノ・幼児↓母)、ツコテシモテ、ナイ、トコト(使ってしまったのだヨ、老婆↓子供)、トコトは主として五十才以上の世代における女ことばである。(ソ)

大阪・「ソー・ワ・ワイ・ウェ」代名詞系文末。ソーは「それ」と指示する語氣が強められて文末副化したものであろう。アンナコト、ユイヨンネン、ソー(あんなこと言っているんだ、ソレ、三十

男同士。ワ・ワイ(エ)は自分の見聞、意見を相手に主張する言い方である。女子ことばである東京風のワが昇調であるのに対し、地ことばのワは降調になるし、男女を通じて一般に用いられる。ナ行文末が相手に眼を向けたよびかけとすれば、これは自分の判断・情意中心の内向きの表現といえる。このような表現差はナが汝と関連づけられるのに対し、ワは我から転成したものである所から生じるのであろう。ワイ・ウェとなるといっそう強い主張となり、それだけぞんざいになる。ワ・ワイ・ウェがダス・デス・マスに添加されるとスと融合して、ダッサ(イ)・テッサ(イ)・マッサ(イ)となる。岸和田あたりではこのワイ・ウェがさらに、「シヨীগナイ、ワシ」のようにもなる。「我」系文末詞に関し、泉南できかれる。カーニ、カマレチャト(蚊にくわれているよ)、ハヨ行コラ(早く行こうよ)なども、カマレテアルワ、イコ、オラ(ウラ)のように我系文末詞の融合したものと思われる。(ソ)

大阪・「ヤン」助動詞系文末、助動詞のヤの断定の語氣が強められるとヤンとなり文末詞としての機能が生じてくる。主として女子に用いられる。ソソナン、シランヤン(そんなのは知らないワ・女高生同士)、ココニアルヤン(ここにあるワヨ・女高生同士)(ソ)

三重・「テ・ト」「って」は「ヤ(ダ)」と合して、ヤテ・ヤトとなるが、四日市には、ナニイイがあり、南伊勢ではナンエエと使

う。(ソ)

三重・助詞敬語。原則として上・中・下の三段階であるが、中と下との区別はぼやけてしまふことが多い。

	上	中	下
カ(疑問)	カナ	カ	カレ
ヤ(疑問)	ヤナ	デ	ド(長島)
ソ	○	ソゼ(ジエ)	ド
ネ	ナア	ノオ	ネヤ(ニヤ) ニヤア
コレ(呼びかけ)	コリ	コレ	コラ(長島)
ヤロ(だろ)	ヤリ	ヤレ	ヤロ(長島)

長島ではイ・エ・オの母音で三段の敬意を示そうとする傾向が見られる。紀州の古座あたりで、ニイ・ノオ・ナアと三段の敬意を示す方法と一致する。この種の助詞敬語には土地の人達はかなり敏感だが、馴れない者には全然わからないため、いままであまり注意されなかったが、いわゆる「敬語のない土地」には、広く見られる現象だ。だから、少なくとも近畿には敬語表現のない土地はない。

(ソ)

和歌山・「ソー」促がす意をあらわす(紀北)。例えば、他人をして文を沓かそうと促すとき、ハヨ カコソー。「食べさそう」は、

タベヨソー・タベヨソラ・タベヨソラヨ。「それ」とか「そら」とか、けしかけるときのかけ声がついて文末助詞なったものである助うか。(ソ)

和歌山・「文末助詞による敬意表現」和歌山ではいいねいなことばとして、ノシという文末助詞をつけるのが一つの特色である。いまは中年以上の女性語であるが、山間地方では男子も用いることがある。もとは男女ともに用いられていたであろう。ノシ・ノーシ・ノーラ・ノラ。敬語表現の素朴な姿として、また転じて返事、挨拶として用いる。

海草郡下津町

ナー 対等、敬意なく、やや感嘆的、土着語。

ネー 新しい言葉、女性が多い。上品で多少あらたまつた感じ。

ノー 自分の気持を前に出して相手におしつけていく感じ。親しみの感じ強く共感共鳴を期待。

ノシ 相手への敬意をこめ、自己主張をささえる。来客などに女性を用いる。

ノイ 親愛をこめた呼びかけ、返事のとくのみ用いる。老人の女性に多く男もときに用いる。(ソ)

滋賀・「ホン(ナ)」軽く旨い張る。軽く旨いिकास気持で念をおす。非常に親しみのこもつた語。湖東から湖北、さらに湖西の高島

郡の一部、犬上郡保月ではホニとなる。ソナナコト、ウソヤホン。
知ランホンナ。行ッテコホン、往ンテコホン。(ソ)

滋賀・「トー(トン)」依頼。動詞運用形接続。湖南の大津、草津
で使われる。待ットー(トン)、シトー(トン)(待ッておくれ、し
ておくれ)、補助動詞に入れるべきもの。(ソ)

滋賀・「カイサ」「じゃないか」の意。湖南、アルヤンカイサ(あ
るじゃないか)。(ソ)

奈良・「——ヤト(ヤテ)」疑問(——ッて)の意。北部。「——
ッてば・ったら」(強題)北部、——チュータラ、——チューノニ。
(ソ)

兵庫・「ガナ」「とも」の意。イクガナ(行くとも)とガナを使う
ことが多い。このガナは「とも」よりも少し軽く、親しみもこもっ
ていて、「行くわよ」の「わよ」に対応するかと思われる。ただし、
女性専用語ではない。但馬で反抗的にイクガアとも使われ、播磨で
はイクガイ・イクガともなる。「じゃないか」に対応するかと思わ
れるのは、高砂でココニアラレ(ここにあるじゃないか)で、これ
がガイと結びついた、知ランガレもある。赤穂ではこの勢力が強
く、ココニアラレ、知ルカアレとなり、女性はシルカアノと使う。
この種の表現は神戸でも、イッタルカレエ(行ッてやるものか)、
スルカレ(するものか)、メンダルワレエ(こわしてやるからそう

思え)のように使うし、淡路でも、イノカレ(帰ろうよ)、ナイワ
レ(ないわよ)、ケエヘナレ(来ないじゃないか)のように使う。
この種のアレ・レは大阪の河内にもあり、紀州でもよく使う。(ソ)

兵庫・「イ・ン」カイ・ガイ・ワイ・ドイ・ナイ・トイのように
他の助詞に付いた形で現われる淡路独特のもので、多少の強めの働
きをしている。その点、アレ・レとよく似ているが、アレ・レの方
が強めはよほど大きい。淡路にはまた同じく他の助詞についてしか
現われないンがある。明治時代まで旧洲本町の中流以下の婦人が使
ったものである。マアア、ソオカン、アテ、チットモ、シラナンダ
ザン(まあ、そうかね、わたしはVちっとも知らなかつたわよ)。
疑問のカと念を押すソだけにつくものだから、用法はイヤレとだい
ぶ違うが、おそらく、カナ・ソナのナが捲音節化されたものらし
い。ソオカンという使い方は三重から紀伊にかけてかなりみられる
し、カナ・ソナの形は四国にも見られるものだからそれらと関係が
あるに違いない。(ソ)

兵庫・「テ・ト」「何ですって」のような「て」はナンヤテとも使
うが、ナンヤトともなる。播州ではアンネント・ナイネント(ない
んだって)のようになる。淡路では、ナイテヤ(ないって?)と使
う。「行ッてば」のテバに当るのは但馬では、イクツチャ。播州
では、イクチュウタラである。(ソ)

兵庫・「ワ」ココンアルワ(ワイ)と使う。但馬ではワアともなる。淡路では助詞の終止形語尾と融合してライ・ラとなる。イットライナア(行っているわ、ねえ)、イイヨラ(言っているわ)、また、打消の助動詞とも融合してヘナともなる。イケヘナ(行きませぬわ)。(ソ)

兵庫・「マソ」「ますぞ」の転。「北播の方言」に、加西市にある形。言ッタゲマソ。このゲが省かれて、言ッタマソの形も記されている。シタゲマソ・ヤッタゲマソ・ヤッタマソ・続ンダゲマソ・続ンダマソ・払ウタゲマソ・払ウタマソとなる。また、これと同様の「マホ」「マヒョ」が加西市あたりに広くあるという。これがさらに省略されると「マ」になる。行キマホ、行キマヒョ、行キマ。

(ト)

兵庫・「助詞敬語」全助動詞敬語のある土地だから、助詞敬語は殆どないようだ。淡路で、センセ、ソッチャノ道チガウデ(先生そちらの道とは違いますよ)のデが敬語の意に用いられる。淡路のソナも助詞敬語である。(ソ)

香川・徳島・「ワ・ワイ」軽い感動。wa=sirawa(知らんわ)、vai=sirawai, deva=sirandeva, zo=siranzo, no=samu-kaOa-no:(n)

高知・「ワ」強意。単独で用いられることはほとんどなく、ネ。

エを伴い、ワネ・ワエの形で用いられる。キノーカイスイヨクニイタワネ、ソイタラ、アメガフリダイテ、コマッタガチガウ(昨日海水浴に行ったのですよ、そしたら雨が降り出してほんとに困りました)「……シタチガウ」は「……したが普通とは違う」の意でよく用いられる。(コ)

高知・「ガ」共通語のガと多少違った用法がある。(全県)オンシヤ、カキヨ、ヌスミ、ヨッツロガ(お前は柿を盗んでいただろう)オマンモ、シツチョル、ローガヨ(あなたも知っているでしょう)、高知市およびその周辺では、ガ・ガヤは、目上に使用することは少ない。ガヨ・ガエは、目上にも使用する。このガの一群は、おおむね推量形の下に接続して、念を押す場合であり、時に多少反ばく的な気持の入ることもある。ハナチャンノ アシワ マックロイガ(花ちゃんの足は真黒いさ)、オラーソナ コタ キカンガヤ(おれはそんな事聞かないさ)右のガの用法も大体全県的である。(ただしガヤ・ガヨは、幡多郡ではあまり用いられない)、オラー、ドーイタチ、ノムガン(おれはどうしても飲むさ、田野町)、右のガの類は、大体において詠嘆感動をあらわす。(コ)

高知・「チャ」(チャにあらず)、ガイニ フッタラ イカンチャ(強く振ったらいけないさ)、チャは、軽い詠嘆をあらわすが、念をおしたり、相手に注意を喚起させたいという気持がふくまれている。

る。中村市中村ではチャラ（チャラにあらず）も使用される。ピン
ボンシテワ イカンチャラ（いけないさ）「モ」軽い詠嘆をあらわ
すが、軽く言い放つたり、窮状をうったえたりもす。土佐で広く使
用されるが、幡多郡ではモンを専ら使用する。アタシャー、ヒトリ
デ、イクモ（わたくしはひとりで行くさ）（コ）

「チ」軽い詠嘆をあらわす（全県——ただし幡多では清水市で使
用する）トリヤ ヨータマゴ ウムチ（鶏はよく卵をうむさ）（コ）

「ヤノ」軽い詠嘆をあらわす。主として女子が使用するが、男子
が女子に対して言う場合もある。旧豊永村、旧森村、池川町などで
使用する。主に助詞の運用形に接続する。マタ キヤノ（また来な
さい——大豊村では、キヤノが多い）（コ）

「ツワ」あまり確實でない根拠に立って、相手に伝言したり、紹
介したりする場合である。大月町や大方町出口で。老人語。ウシヤ
ー シンダツワ（牛は死んだとき）。（コ）

「アイ」軽く念をおす。中村市中村・清水市布・佐喜浜町などで、
主に中年以上の女子が使用する。モー シバイワ スンダカヨテイ
（もう芝居はすんだの、ね）（コ）